

## くらしナビ ライフスタイル



あしたばの集まりで女性スタッフ（右）と一緒に昼食を作る高橋一夫さん（仮名）。料理は不慣れだったが、新しい挑戦だ=東京都江戸川区のなぎさ和楽苑

## 職場以外の居場所求め

認知症  
新時代

第4部 できることある

②

現役世代で襲う若年性認知症。働き盛りで職を失うと、経済的な問題とともに「居場所」や「やりがい」をどこに求めるかが切実な課題となる。認知症に関する公的支援やサービスは高齢者への対応が中心。若く、体の機能が衰えていない若年性認知症の人

夫さん（48）は「家では料理をしないので」と苦笑。しながら、慣れない手つきで野菜を切り、肉を炒めた。高橋さんは5月に認知症と診断されたばかりだ。倉庫会社で働いていたが、勤務を続けることは難しく、今は休職中。復職のめども立たない。あしたばまでは、都内に自宅から地下鉄を乗り継いで一時間以上かかる。看護師の妻（48）が、あちこちに問い合わせ、施設やサービスを探したが、他にはほとんどなかつた。

6階のガラス戸を開け放つと、心地よい風が吹き抜けた。東京湾にほど近い、東京都江戸川区の高齢者施設「なぎさ和楽苑」。40～60代の男女約10人が、テーブルを囲んで昼食を作った。高橋さんは2年ほど前から物覚えが悪くなつたと感じていた。倉庫では大量の書籍を扱つて、運んだ本をどこに置いたら、妻はよく、高橋さんが新聞折り込みの求人情報をめぐる姿を見たという。

● 生活に張り合い

あしたばの集まりで女性スタッフ（右）と一緒に昼食を作る高橋一夫さん（仮名）。料理は不慣れだったが、新しい挑戦だ=東京都江戸川区のなぎさ和楽苑

複数に問い合わせを  
神戸市の萬字御会社に勤め  
同社協は、若年性認知症の

## 複数に問い合わせを

自分自身や身近な人が認知症かもしれないと思った時の相談窓口は、自治体などが設けている。ただ、支援制度やサポート団体について十分な情報が得られるかどうかは、地域によって差があるのが現状だ。複数の窓口に問い合わせ、信頼できる相談先を見つける。

全国的に電話相談を受け付けている主な窓口は以下の通り。いずれも通話無料。

◆認知症介護研究・研修大府センター（愛知県）=若年性認知症コールセンター☎0800・100・2707（年末年始と日曜祝日を除く10～15時）。若年性認知症について相談を受け付けている。

◆認知症の人と家族の会（京都市）=☎0120・294・456（土日祝日を除く10～15時）。携帯電話からは☎075・811・8418（通話料は有料）。

◆認知症予防財団（東京都）=認知症110番☎0120・654・874（月曜と木曜、10～15時）。同財団は7月、1992年の開設以来寄せられた相談約2万1000件の記録をデータベース化した。過去の相談内容が確認しやすくなり、継続的な相談にもきめ細かく対応できるようになった。

● 嫌がる仕事でも

6階のガラス戸を開け放つと、心地よい風が吹き抜けた。東京湾にほど近い、東京都江戸川区の高齢者施設「なぎさ和楽苑」。40～60代の男女約10人が、テーブルを囲んで昼食を作つたり、梨狩りなどに出かけたりする楽しみもある。フォンで撮影して妻に見せたが、気持ちはやはり「妻のバザー」が出す、はし置きや髪飾りを作つたり、梨狩りなどに出かけたりする楽しみもある。だが、それだけではなく時間が買いつぶつになつた。秋のバザーで1時間以上かかる。看護師の妻（48）が、あちこちに問い合わせ、施設やサービスを探つた。

高橋さんは2年ほど前から物覚えが悪くなつたと感じていた。倉庫では大量の書籍を扱つて、運んだ本をどこに置いたら、妻はよく、高橋さんが新聞折り込みの求人情報をめぐる姿を見たという。

同社協は、若年性認知症の

現役世代で襲う若年性認知症。働き盛りで職を失うと、経済的な問題とともに「居場所」や「やりがい」をどこに求めるかが切実な課題となる。認知症に関する公的支援やサービスは高齢者への対応が中心。若く、体の機能が衰えていない若年性認知症の人

現役世代で襲う若年性認知症。働き盛りで職を失うと、経済的な問題とともに「居場所」や「やりがい」をどこに求めるかが切実な課題となる。認知症に関する公的支援やサービスは高齢者への対応が中心。若く、体の機能が衰えていない若年性認知症の人

夫さん（48）は「家では料理をしないので」と苦笑しながら、慣れない手つきで野菜を切り、肉を炒めた。高橋さんは5月に認知症と診断されたばかりだ。倉庫会社で働いていたが、勤務を続けることは難しく、今は休職中。復職のめども立たない。あしたばまでは、都内に自宅から地下鉄を乗り継いで一時間以上かかる。看護師の妻（48）が、あちこちに問い合わせ、施設やサービスを探つた。

6階のガラス戸を開け放つと、心地よい風が吹き抜けた。東京湾にほど近い、東京都江戸川区の高齢者施設「なぎさ和楽苑」。40～60代の男女約10人が、テーブルを囲んで昼食を作つたり、梨狩りなどに出かけたりする楽しみもある。だが、それだけではなく時間が買いつぶつになつた。秋のバザーで1時間以上かかる。看護師の妻（48）が、あちこちに問い合わせ、施設やサービスを探つた。

高橋さんは2年ほど前から物覚えが悪くなつたと感じていた。倉庫では大量の書籍を扱つて、運んだ本をどこに置いたら、妻はよく、高橋さんが新聞折り込みの求人情報をめぐる姿を見たという。

同社協は、若年性認知症の

現役世代で襲う若年性認知症。働き盛りで職を失うと、経済的な問題とともに「居場所」や「やりがい」をどこに求めるかが切実な課題となる。認知症に関する公的支援やサービスは高齢者への対応が中心。若く、体の機能が衰えていない若年性認知症の人

現役世代で襲う若年性認知症。働き盛りで職を失うと、経済的な問題とともに「居場所」や「やりがい」をどこに求めるかが切実な課題となる。認知症に関する公的支援やサービスは高齢者への対応が中心。若く、体の機能が衰えていない若年性認知症の人

人の居場所が足りない現状を

変えようとおひさまを始めた。担当の小山尚子さんは「家族が経済的に厳しくなることが多いので、それが第一の課題になり、本人の居場所や生きがいを探すのは次の次になってしまふ」と指摘する。

中山行男さん（58）=仮名=も昨年6月、若年性認知症と診断されて休職中だ。人事担当者が上司から休職を受け入れるしかなかった。同居する中山さんの母（87）も認知症だ。ディサービスに通う母を朝送り出し、夕方出で雑誌を読んだり、趣味の自転車で、あてもなく近所を回つたりする日々が続いた。

「あしたば」に通うように「あしたば」に通うようになり、生活に張り合いが出た。同世代や少し年上の利用者やスタッフとの会話を楽しみ、作った料理の写真をスマートフォンで撮影して妻に見せたが、彼はほとんどのなかつた。

迎え、身の回りの世話をするのが日課になった。ようやく親孝行ができるようになったが、半面、意図の疎通がうまくいかないと、つい声を荒らげてしまつこともある。

会社を休み始めて半年以上が過ぎた今春、神戸市社会福祉協議会が毎週1回開く若年性認知症の人の集い「おひさま」をやり、参加するようになつた。壁を相手にしていた趣味のテニスは、ポールを打ち合つ仲間ができた。「冗談を言い合つたりするのが楽しい」と顔をほころぼす。

だが、やはり「何か仕事をしたい」との思いは強い。「まだ働ける。人が嫌がるような仕事でもいい。何かをしたかったら、妻は喜ぶ」という。その思いは自分自身へ見つけてもらつことを一つの目的にしている。所長の作業療法士の比留間ちづ子さんは「ここをきっかけに、地域での貢献をかけていくふらさが混じり合つたものだ。来春には健病手当の受給期間が切れる。その後は、新たに「できる」とを探つたりだ。

● 地域社会に貢献

「あれ、変なおじさんが見てるんじゃない?」『え、俺のこと?』 東京都新宿区の「若年認知症社会参加支援センター」ジョイント。60歳前後の男性利用者4人が、地域のイベントに参加した時の写真を見ながら冗談を言い合つてている。

就労はできなくなつても、身の回りのことは自分でできることでは持てる能力を生かしてもらおう、革細工のペンケースやカーデケースなどを作り、販売もしている。

ジオイントに通いながら、地域の福祉施設でボランティアをするなどして、居場所を見つけてもらつことを一つの目的にしている。所長の作業療法士の比留間ちづ子さんは「ここをきっかけに、地域での貢献をかけていくふらさが混じり合つたものだ。来春には健病手当の受給期間が切れる。その後は、新たに「できる」とを探つたりだ。

「五味齋、写真も」